

ぐる〜ぷねっと

～みんなの輪～



沼津市大岡団地の母親クラブのOBが中心となり、地域とのかかわりを持ちたいと、昭和六十三年に、大岡地区の社会福祉協議会のボランティア活動に応募したのが「シュークリーム」結成のきっかけです。

メンバーは、現在十三人。年齢は三十代から四十代で、職業は栄養士、主婦、ピアノ講師の方々とす。

活動は、地区の寿サロンでの給

ボランティアで心豊かに 《シュークリーム》

食サービスを他のグループと分担して行い、一人暮らしのお年寄りにとっても評判で、希望者には宅配もしているそうです。また、地区社協主催の餅つき大会、文化祭、納涼祭などのお昼作りや様々な手伝いのほか、デイケアセンターでの入浴介助や食事作りなど、活動の幅もどんどん広がっています。

しかし、とてもやりがいのあるボランティアなのでメンバーを増やしたいが、後に続く人がなく、それぞれ負担が多くなってきたという悩みにも直面しています。

メンバーの人たちは、この活動により、「人の役に立つことができ、心が豊かになった。」「人とのつながりが広がった。」「最初は、自分にはできないと思っていた入浴介助もやればできて、大きな自信となった。」「夏休みに子供と一緒に活動したことが、子供たちにとっても良い体験になった。」など、今後も長く続けていきたいと抱負を語ってくれました。

「皮（活動）は、パリッと堅いけど、中身はほんわりしたグループのシュークリームは、地区社協からも高い評価を得ています。」

連絡先 沼津市大岡一八二五—四
電話 〇五五九（二二）八三五八
代表者 佐竹 利恵子

国際交流は

人と人とのつながり

〈清水国際ふれあいコーナー〉

清水市中央公民館の国際交流セミナーで知り合った人たちが、「清水市に住む外国人と市民との相互理解を深めるために、情報交換とふれあいの場を作りたい」と平成元年に結成し、翌年三月同公民館に、清水国際ふれあいコーナーの設置が実現しました。それがこのボランティアグループの名称となりました。

会員は約五十人。職業は、主婦、英会話講師、会社員、自営業、高



校生と様々で、年齢も十代から七十代と幅広いのが特色です。会員の中には、ホームステイなどの外国滞在中に親切にされた経験者も多く、その恩返しになればと参加している方もいます。

活動は、生活に関するいろいろな情報の収集・提供、英語等による電車・バス案内の作成、ホームステイ・通訳の紹介、外国圖書の貸し出し、そして、毎週土曜日には会員が国際交流に関する相談に応じています。また、外国人のための日本語講座を開く一方、地域で日本語を教える人を養成するために日本語教授法の講座も行っています。

生活の中で、自分たちに何ができるか、何が必要かと研修を行い、横浜市などへの交流見学会にも参加しています。また、行政と協力して国際交流を進めるなど、その活動は積極的で充実しています。

「国際交流は、人と人のつき合い、ひとりひとりのつながり」という考えをもとに、自分たちの手でひとつひとつ作り上げていこうというグループの姿勢に、国際交流の原点を見た思いがしました。

連絡先 清水市入江二―一四三
電話 〇五四三(66)一九三五
代表 小坂 伊沙子

親子のふれあいを楽しむ

〈どろん子クラブ〉

公立幼稚園の二年保育を希望する母親たちが、子供たちに入園前の一年間を有意義に遊ばせようと集まり、どろん子クラブを結成しました。

平成二年に二十四人(十二組)で始まった会が、集団に溶け込める子供ならばと年齢を下けたこともあり、多いときは九十人(四十五組)にまで増え、現在では六十六人(三十三組)の親子が楽しく参加しています。



週一回、木曜日に、晴れの日には公園で、雨の日には地区の総合会館に集まります。前半の一時間は自由遊び、後半は手遊び、紙芝居、読み聞かせなどを中心に遊んでいます。

遊びの内容は、母親が四人づつ一ヶ月交替で当番となり、その月の計画を立てていますが、シャボン玉遊びや、遠足、マラソン大会を行ったり、また、地元飯田幼稚園の協力もあって、畑やプールを借りての苗植えや芋掘り、プールでの水遊びなど今では内容も盛りだくさんです。

とかく家にこもりがちな専業主婦の若い母親たちが、お互いの子供の成長を見ながら、一緒に親子の触れ合いを楽しんでいます。そのうえ、子育ての情報を交換したり、悩みを相談し合ったりと、有意義な時間を過ごすことができ、大変良い刺激になるそうです。もちろん子供たちも毎週木曜日を楽しみにしているそうです。

毎年三月には、一年のまとめとして、各々の親子の思いをつづった文集を作成するなど、その活動はとても熱心です。

連絡先 浜松市飯田町一八二―三
電話 〇五三(463)五四九二
代表者 藤浦 深雪

情報誌あれこれ

富士市 ボンエルフ

「ボンエルフ」は富士市保健婦人センターが発行している情報誌です。平成二年十月に第一号が発刊、年六回、隔月に発行されています。発刊のきっかけは、富士市主催の女性フォーラムへの参加を機会に結成されたグループに、保健婦人センターが協力する形で作られたのが始まりです。

名称の「ボンエルフ」はオランダ語の「生活の庭」という意味で「生活の中から発する諸問題を広い視野で考えたい」との思いから名付けたそうです。配布先は、公民館・図書館・銀行、そして女性グループなどで、毎回千部を配布しています。



編集員は現在八人。平成四年五月の第十一号から編集員の一部を入れ替えし、年齢も二十代から五十代と幅が広がりました。保健婦人センターの相談員二人以外は主婦の方々です。それぞれの地域で活動しながら、ボランティアで編集に参加しています。

編集会議は週一回。女性問題に視点を置いて、女性の地位・政治参加・環境問題・生活面など、広い分野から企画が練り上げられます。そんな中から決定したテーマは「ボンエルフレポート」として特集されます。その他、保健婦人センターからの情報・お知らせ・女性グループからのメッセージ・人物紹介など、内容も豊富です。

「ボンエルフ」は比較的堅いテーマを取り上げているにもかかわらず、「早く次号を」と期待されています。その理由は、タイムリーな企画や、時代を先取りした情報、そして、尖鋭的な切り口が読者の共感を得ていること、企画・取材・編集・製本までほとんどが、編集員の手作りだという点にあるようです。そのため、行政発行の堅さは感じられず、自然に、地域に定着してきたということです。しかし、読者が増えることで、「自分たちの思いだけが前に出て、押し付けにならないように気をつけたい。」と情報提供者としての責任もますます重くなったとその姿勢も慎重です。

今後の課題は、「女性問題は裏返せば男性の問題、だから、性別は問わず、一人でも多くの人たちに問題意識を持つて欲しい。そのため情報として、『ボンエルフ』が少しでも役に立てるように頑張りたい。」と話してくれました。

した。

保健婦人センター三階、婦人情報コーナーで編集会議は行われています。「地域に密着した情報を地元で作る」そんな思いでボンエルフ編集スタッフは、今日も熱心に活動しています。



ボンエルフ編集スタッフの皆さん

私たちが、多くの情報の中から自分に合った情報を得る一つの手段として、地方発の情報誌を紹介しました。そんな情報から、多くのネットワークが広がることを期待したいと思います。問題意識を持つて、情報を活かし、明日に向かって一歩を踏み出すキッカケを探して欲しいと思います。

女と男の共生の時代を目指して！

ポーランド系のドイツ人であるクリスティーナさんは、ポーランドで、看護婦をする傍ら企業で通訳をしていました。そのときにブログラマーの日吉さんと出会いました。その後、帰国した日吉さんに招かれて一九八〇年に来日、一年後に結婚しました。結婚当初は三島市内に御両親と同居。沼津―大阪―東京への転勤を経て、八五年にはドイツに駐在。三年間を過ごして帰国、現在に至っています。お子さんは憲司君（十歳）と智紀君（七歳）の二人です。

＜家庭において＞

男性が上で女性が下というような習慣があることに驚きました。食事の内容や入浴の順番など「男の人は働いているから」といった具合に、夫の家では多くの部分において女性とは同等的ではないのです。祝いごとや法事の席に一家を代表して男性だけが出席するのも理解しにくいことでした。母国では皆集まってパーティー式に行い、常に家族が一緒です。また、日本のように長男の嫁が親を介護するという習慣がなく、男女の区別なく皆で面倒をみます。

夫は古い習慣の中で育った世代

のためか、意識を変えるのは大変でしたが、少しずつ分かってくれるようになりました。

＜子育て・教育について＞

長男が二年生のとき、子供のた

日本の習慣の中で 日吉クリスティーナさん

ポーランド出身。1980年来日、翌年結婚。
御主人の転勤のため各地で暮らし、ドイツ
駐在の後、三島市に在住。



なつき合いができたらし。区切りをつけて自立をさせたい。物を大切にすること、親や先生に対する言葉遣いには、厳しいしつけの態度が必要です。我が家ではおもちゃは余り買いませんので、子供たちは自分で作ります。日本の受験問題は大変なことだと思います。ポーランドでは、学

めに日本の教育をもっと深く知りたいと思い、PTAの役員活動に参加しました。お母さん方は、子供のことにとても熱心で、よく手をかけていると思います。でも、もっとリラックスして、オープン

校の中でしっかりと学び、分からないところは先生がボランティアで補習をしてくれましたから、子供たちの通う塾はなく、学校から帰ると親と一緒に過ごすことができます。また、保育施設などが整っていますので共働きが多く、男女の役割の区別なく家事や子育てを共にします。

＜日本の女性と環境＞

優しさや人への気遣いがありますが言葉が少なく、自分を表現することが不得手な人が多いと思います。はつきりしている自分としては分かりにくく、もっと心を外に表わせたらいいのと思っています。大阪の方はシャキシャキしていて接しやすかったです。

日本の印象は来日する前のイメージどおりに良く、三島の環境は緑が多く、山と海が近くて好きな所です。皆さんによくしてもらっています。さらに多くの友だちを作りたいと思っています。

ポーランド語・ドイツ語・ロシア語・英語を話すクリスティーナさんは、英会話講師と通訳の仕事をしていています。子供はどちらかの母国語で育てようと、難しい日本語を一生懸命学んだそうで、母親として毅然とした子育ての様子が見えました。「日本はいろいろな手続きが複雑で、外国人には厳しい社会だと思っています。看護婦の資格も、こちらの試験を受けてからでないと使えません。ヨーロッパのように、見習い期間を経て使えらるよいのですが」と望んでおられました。



本だな…読んでみました



「熱願冷諦」―美尾浩子遺稿集―

静岡県出版文化会

一、六〇〇円

熱願冷諦



平成三年十一月、静岡県立大学国際関係学部長の美尾浩子先生が亡くなりました。美尾先生と生前親しくされていた人たちが、その残された作品を一人でも多くの人たちと共有したいとの願いから出版した本です。

本のタイトルになった「熱願冷諦」。これは、美尾先生が大学三年のとき、恩師に筆立てに書いていただいた言葉だそうです。その後、離婚という岐路に立ったとき、今まで「味気ない四字漢字」としか感じてなかった言葉が、自分に語りかけてきたそうです。人生「熱願」だけでなく「冷諦」も必要だと。そして、筆立ては壊れてしまっただけで「形あるものは必ず滅す。しかし、その心は、二十年の歳月を経て、教官から学生に完全に引き継がれていった。壊れた筆立ての永遠性を証明することが私のこれからにかかわっているように思

えてならない。常に何かを求め、しかも心穏やかに日々を送ることが無理なくできるようにするのは、一体いつのことであろうか。」とあるように、心の奥底に息づく座右の銘となったのです。

遺稿の中には、静岡の婦人問題に大変精通した人だからこそその発言が随所にみられます。今、家庭も社会もあらゆる意味で過渡期と言われる中、「生活全般を見直す時期にさしかかっている。だけど、この新しい生活環境に振り回されない。自ら足元を見極めることで、新しい生き方の方向づけは可能。」「時代の期待に応える責任がある。甘えを棄てて、人として生きる気迫を持ちたい。そのために状況を正しく把握し、行動する勇氣が必要。」と励ますと同時に、男女が共にかかわりを目ざすとき、平等の責任を持つべきだと語っています。さらに、随想の部分には、美尾先生が大真面目に生き、どんな事柄にも一生懸命に向かう姿勢が感じられます。

つくづく美尾先生の早世が惜しまれます。本書冒頭の高嶋健一先生の句のごとくです。

「悲しともまた悔しとも鮮烈に五十五歳を突走りたり」(F)



「男も育児休職」

太田睦著

核家族においての性別役割分担の無意味さを悟った著者が、父親として当たり前のこととして取った育児休職。この体験を技術者の眼で観察・分析。固定観念にとらわれない著者の考え方が自然体ですがすがしい。

新評論 一、六〇〇円

「子供の愛し方がわからない親たち」

斎藤学著

様々な児童虐待の事例を紹介している本書は、社会の変化とともに、児童虐待が古典的な虐待から閉鎖された家庭の中で行われる家族病理的で強迫的な虐待へと移行していると、ケアの現場から指摘している。読後も胸が痛む。

講談社 一、五〇〇円

「外に出ながら老人介護」

樋口恵子著

「人生八十年」という高齢化社会を迎えた日本の介護に関する問題は多い。婦人問題を軸に、男女の生き方・老い方を「いろはがらた」を切り口に考えさせる。今、常識が変わりつつあることが感じ取れる。

文化出版局 一、二〇〇円

「二まできた生と死の選択」

読売新聞大阪本社社会部

生命の誕生・臓器移植から脳死・安楽死そして癌・エイズまで。「いのち」にかかわる様々な問題を豊富な事例をあげながら、私たちに考えさせる本。医学に詳しくなくても理解できる。

海鳴社 一、七〇〇円

「日本の心・世界の心」

TAMIYA

「私たちが豊かさと引き替えになくしたものは何?」「生命を愛する心」「平和を求める心」「そう!日本の心」ではないだろうか。この本は、同社の広告を読んで「日本の心」を思い出した読者からの熱い反響・感謝のメッセージ集である。

学生社 一、六〇〇円

シフォン

育児休業

初めての子を出産したとき在職中だったが、母乳で育てたいと思い、昼休みも職場から近い実家へ自転車をとばし、授乳と不在分を搾乳冷凍し、勤務中は張ってくる母乳を捨てた。

十年前、その体験から『子供の養育期にある女性の就労条件の改善について』というレポートを書いた。「産後休暇は母体の回復期間のみであるが、母子の精神面や母体の生理機能から授乳期間を考えると、一年の育児休業または勤務時間の短縮が望まれ、そして育児が男女の共同参加によるものとして、乳幼児養育期にある男女について、フレックスタイムの導入を望む。」といった内容のものだった。

“子供は次代を担う社会の財産”と考えるならば、人間形成の基礎を築く大切な乳幼児期をもっと社会がバックアップしてもよいのではないだろうか。「母乳を飲むのは子供の権利—山内逸郎(小児科医)」という考えもある。少子化傾向を案ずるならばなおさらのこと、働く女性が育児と仕事のバランスをとりやすい労働環境作りの早期実現が望まれる。

昨春、待望の育児休業法が施行された。まだ問題はいろいろあるだろうが、活用されていってほしいと願わずにいられない。

(A, Y)

手帳

先日新聞で、手帳を持つ女性が多くなったという記事を読んだ。昔は手帳と言えば、働く男性の必需品だったが、社会進出著しい女性にとっても、現在なくてはならぬ物となっているというような内容だった。

思わず、ふむふむとうなづいてしまった。なぜなら子育てが一段落して外へ出る機会が増えたとなん、その必要を感じたからである。まずは、この「ねっとわあく」、次の編集会議を決めるとき、隣の人の手帳をのぞきこんでいたのは私だけだった。「みんな手帳を持っているんだ…」と思ったころには、一年の半分以上が過ぎていて、今さら買うのももったいないと今日まできてしまった。そこで、来年こそは、と勇んで買いに出かけた。

それにしても、なんとたくさん種類のあることか、そしてまるでハンカチ売場のようにカラフルである。こんなにあるのに、私は気付きもしなかった。今さらながら子育てだけだったと自分をふり返る。さんざん迷って、一番小さな手帳を選んだ。来年はこの手帳を予定で一杯にしたい、母親としてでなく私個人の活動の場を増やしていこうと、たった一冊の手帳で夢の広がる一日だった。

(H, A)



あとがき

アンテナを高くして、よりよい受発信をしたいと思いながら、現実には編集の壁と自分の力の限りに挫けたことも……。得がたい経験と出会いの感動が心に残ります。

進藤賀代子

編集員になつて、考えるだけでなく行動することを学びました。これをステップとして、いろんなことに好奇心を持ち、社会とかがわつていきたいと思いました。

古屋 洋子

女性を取り巻く環境の改善、意識の変化は牛歩の如くですが、せめて我が子たちが生き方を選択するころには、法に基づいた多様な選択肢が広がっていてほしいと思います。

山田 綾子

人との出会い、社会とのかかわり、婦人問題に啓発され、編集の勉強と盛りだくさんの一年でした。消化しきれなかったものを今後の課題にして自分の道を探していきたいと思っています。

荒木 弘子

一人ではできなかったものが、多くの力に支えられて、完成しました。この経験を踏み台に、また新しい何かに挑戦したいと思っています。

寺田 悦子

静岡県女性総合センター

あざれあ

平成5年5月 オープン

開設記念事業 4月24日(土)～29日(木)



“女性総合センター”は

女性の自主的、積極的な活動や社会的自立を支援し、来るべき21世紀へ向けて、男女が共に築き、共に担う社会の実現を目指す施設です。

施設のあらまし

図書室、相談室、展示室、団体交流室、
生活関連実習室、茶室、ホール(380席)、
こどもの部屋、研修室、会議室、レスト
ラン他

所在地

静岡市馬淵1丁目17-1
J R静岡駅より徒歩10分
(静岡県勤労者総合会館西側)

建物

延床面積10,158㎡
地上7階・地下1階

利用申込み・問い合わせ

☎ <054> 255-8440

案内図



お知らせ

一、平成五年度静岡県女性の海外研修団員を募集します。

二、この情報誌の「女性編集員」(五名)を募集します。任期は平成五年度一年間で、年間十五回ぐらいの編集会議と取材が主な仕事です。

●申込み等問い合わせは、左記婦人課まで。

ひとひと
女と男の広場
ねつとわあく No.22

平成5年3月

編集・発行 静岡県環境・文化部 婦人課

〒420 静岡市追手町9番6号

☎ <054> 221-3122

表紙デザイン

県浜松工業技術センター 小杉思主世